

コラム

私と「ジーニアス」



池内敏郎

私がジーニアスと関わりを持たせていただくようになったのは『ジーニアス英和大辞典』の執筆、校閲協力者として仕事をさせていただいた今から約16年前です。その後、縁あって『ジーニアス英和辞典 第3版』『ベーシックジーニアス英和辞典』『ジーニアス和英辞典 第2版』の都合4冊で執筆や編集協力に関わらせていただきました。その後も仕事の依頼がありましたが、校務の多忙化や健康上の理由でお断りせざるをえませんでした。ただし、その後もユーザーとして気のついたことを時折編集部にお送りした結果、G5では資料提供者として名前を載せていただき、大変恐縮いたしております。高校での教員生活をスタートさせてから約40年経ちましたが、この辞典の執筆で多くのことを学ばせていただき、その経験が教える時に本当に役立っています。

最近の生徒は本当に辞書をきちんと引けなくなっています。辞書を引いても1番目の訳語を写すだけという生徒が大半です。There is no room for doubt about his guilt. という文を見て、「彼の有罪を疑う部屋はない」と和訳して平気な生徒が大半です。G5ではroomの③に「[…の/…する] 余地；機会、可能性 [for / to do]」という記述があり、訳語の左右の〔 〕内の日本語と英語の記述が関連していることを確認させます。この連語関係の記述は英文読解や和文英訳にとっても役立つ情報で、『ジーニアス英和辞典』の優れている点です。

また、英語に少しでも興味を持ってもらえるように、自分が執筆した時の話（脱線？）もよくし

ます。populationの例文 The population of India is 「much larger [《略式》a lot bigger] than that of Japan. は、実は私がG3で執筆していた時に、Sidney Sheldonの小説を読んでいてpopulationをbigが修飾している文を見つけ、これを参考にG3に入れていただいたものですが、日本の英和辞典でこのことを載せているのは「ジーニアス」だけです。教師も“learner”として絶えず学んでいるという姿を生徒に見せて、生徒の学習意欲を少しでも高めたいという気持ちからこのような話や失敗談をよく生徒にします。

G5はG4よりも本体が約200ページ増え、内容も確実に進化し、引いてみると改めて教わることが多々あります。『英語教育』のQuestion Boxで原川先生が解説されていた「A, if not B」の用例として The concept is difficult, if not impossible, to understand.（その概念を理解するのは難しい、いや不可能かもしれない）が載っていますが、これは言われないと誤解しかねない語法です。また、「no more A than B」の記述も大幅に書き直され、A whale is no more a fish than a horse is. の訳も「クジラが魚というのなら馬だって立派な魚だよ」になっています。

さらに look up to と respect, look down on と despise の類語比較の詳細な記述も参考になります。この類語比較を読み、今までただ機械的にイコールと教えてきた自分が恥ずかしくなりました。これからはジーニアスとは当分の間、縁が切れそうにありません。

（いけうち としろう・新潟県立高田北城高等学校常勤講師）